へ13
3162
12

白縫譚

第廿三編上集

総員作

國貞画

柳亭文庫

仆題冊子
廿三編上
ぬいもの
廿三編下

門へ 13
8162
13

短綆不汲深とい唐土人の常言なるゆ當今俗間ぐ唄小歌ゆちゆれ
はるべのこゝろのもゆゆ君の心をくみうるといふる唱哥を聞時ハ倭も
漢も人情ゆ変ぬ暗合いまゝ妙ゆらぞやされた短綆ゆ深井ゆゝぬ
廣大筑紫の蒼海をらそかゝやゝ此ゝゝあひの物語初編を刊行
ゆゝゝるもゝゝゝふゝぞと算るゆ春秋ゝゝゝも九年とあれバ面壁達磨の
形を脱灘右エ門と楠姫差樹といつる巻中ゆ未ぞぬ人物と若菜姫の天人姿
を並立歌舞井のそれゆゝぬ戯場めゝせゝ首画を出像讃歎的といそ
きんとを思ど智慧の弔桶のみぢゝゝて看官達の尊意をさゝゝゆ不得計バ
漢土の常言と倭朝の小唄の唱歌の暗合を弥増妙と端詞ゆ記つ

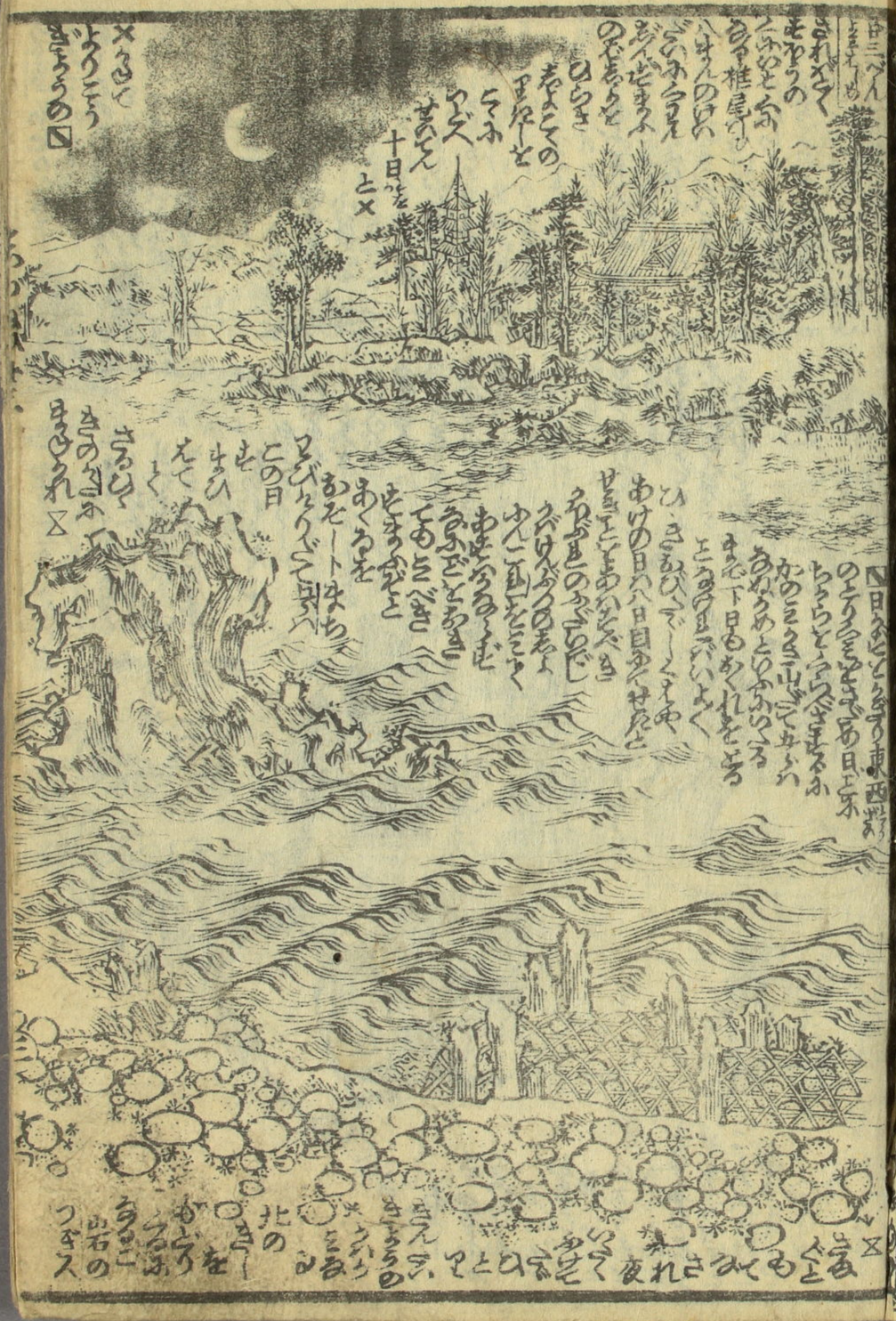
安政丁巳華歳

柳下亭種員

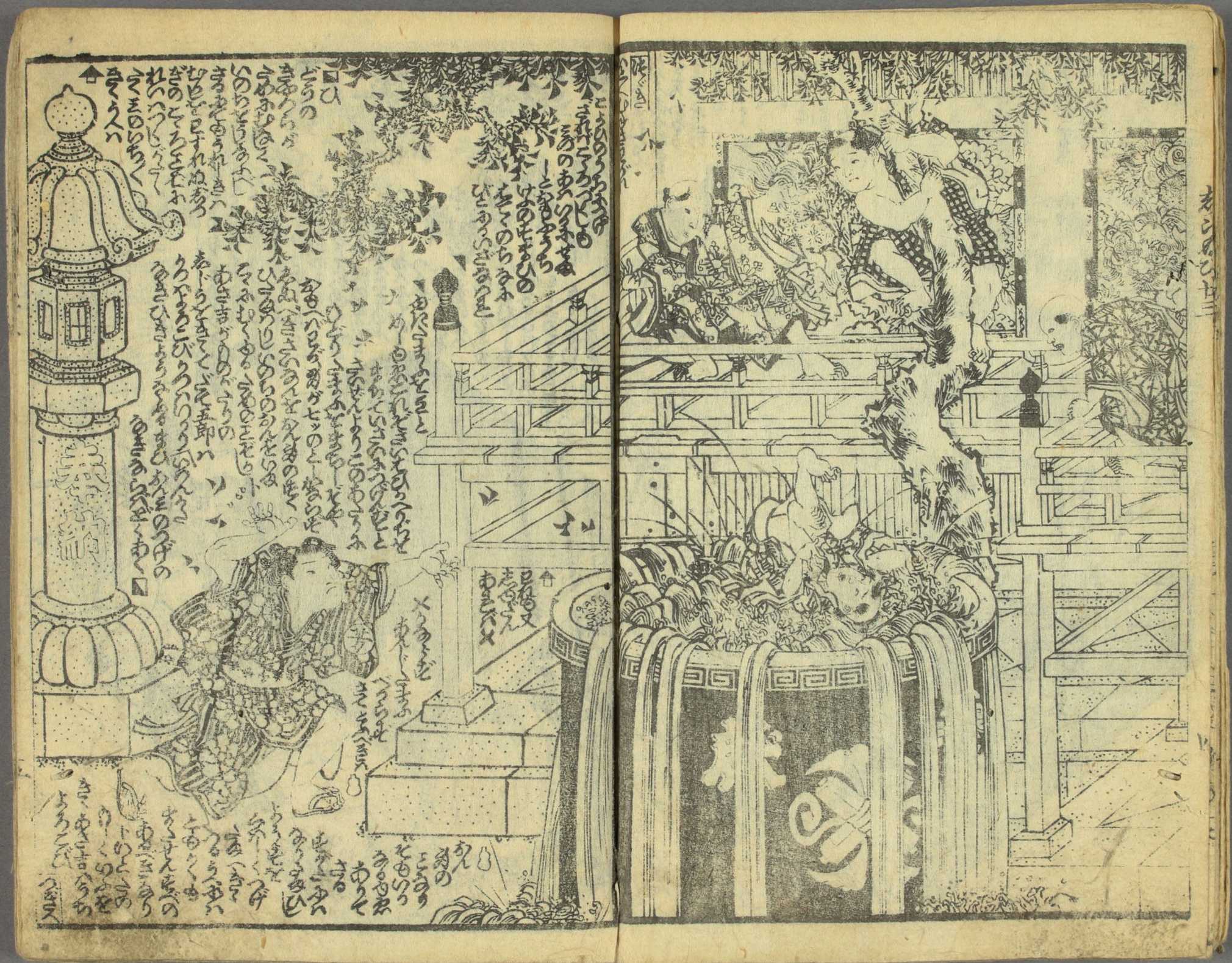
若菜姫
玄海灘右衛門
楠温老樹

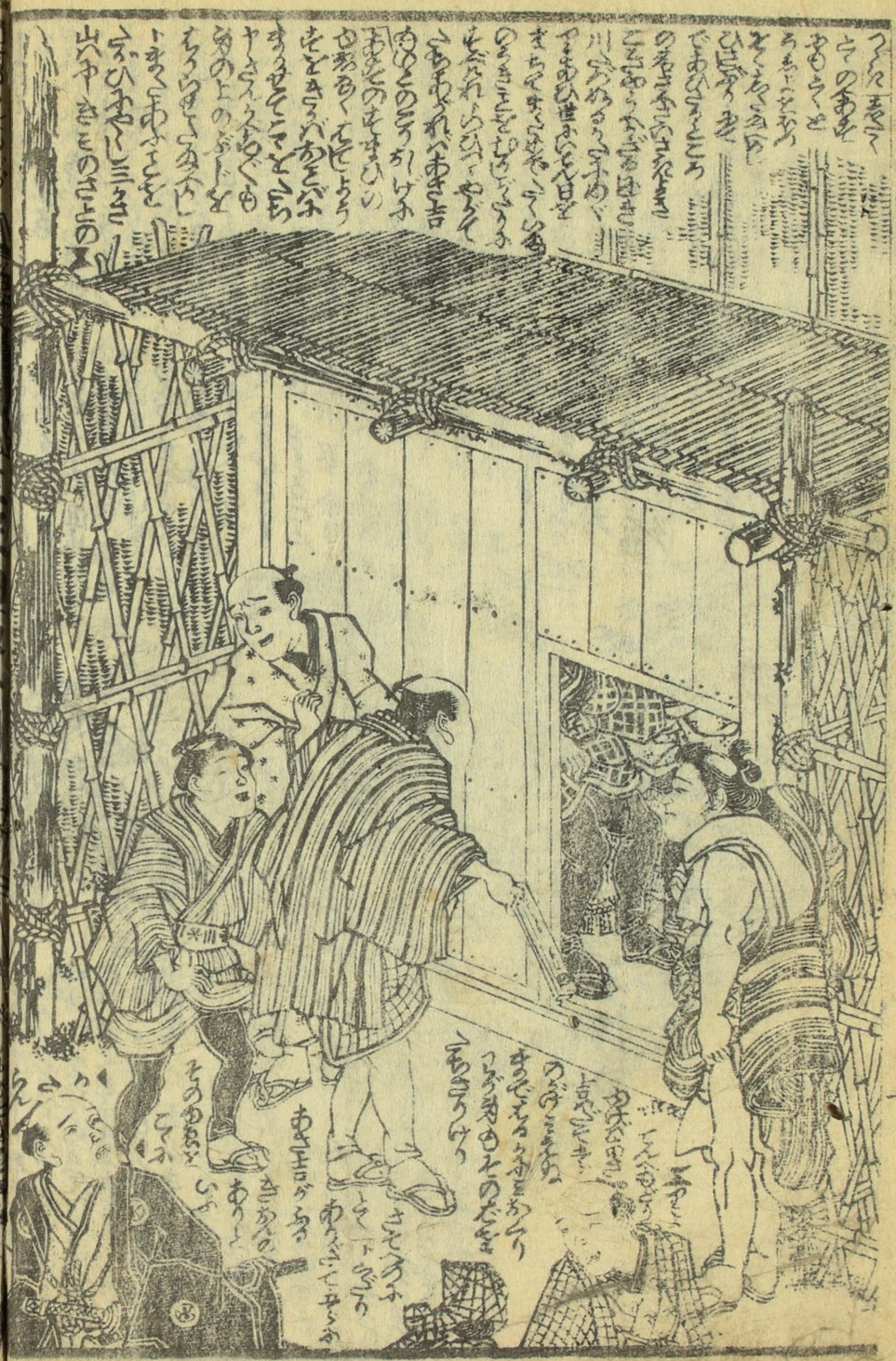
七草宮丁禮が死鬼

青柳の春之助



鳴子
岩の
朝吉
伊達五郎
危急を
告る



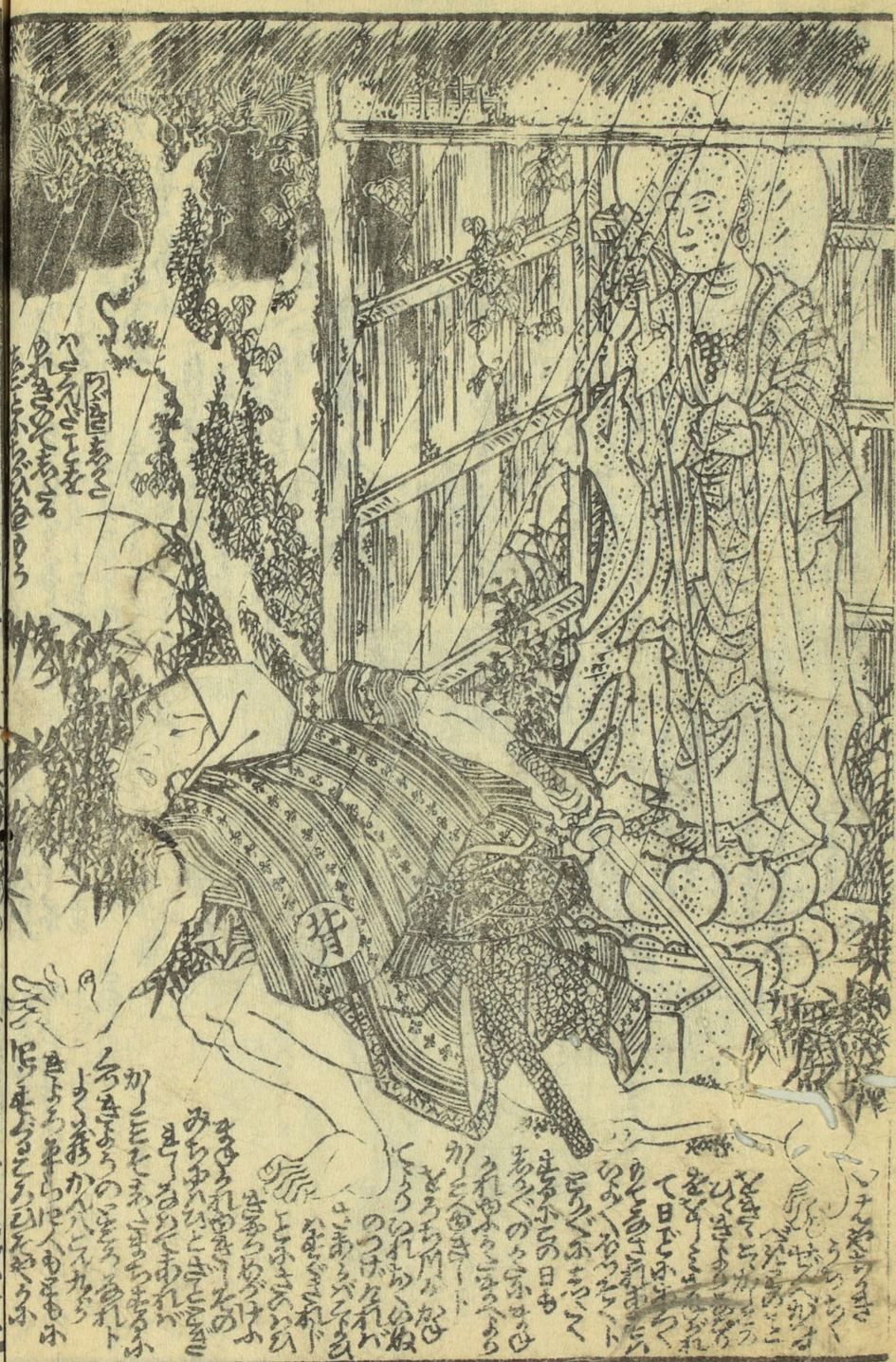


三笠山
大蛇川
不知火
大漁
貴船
待乗山
仰山
人見川

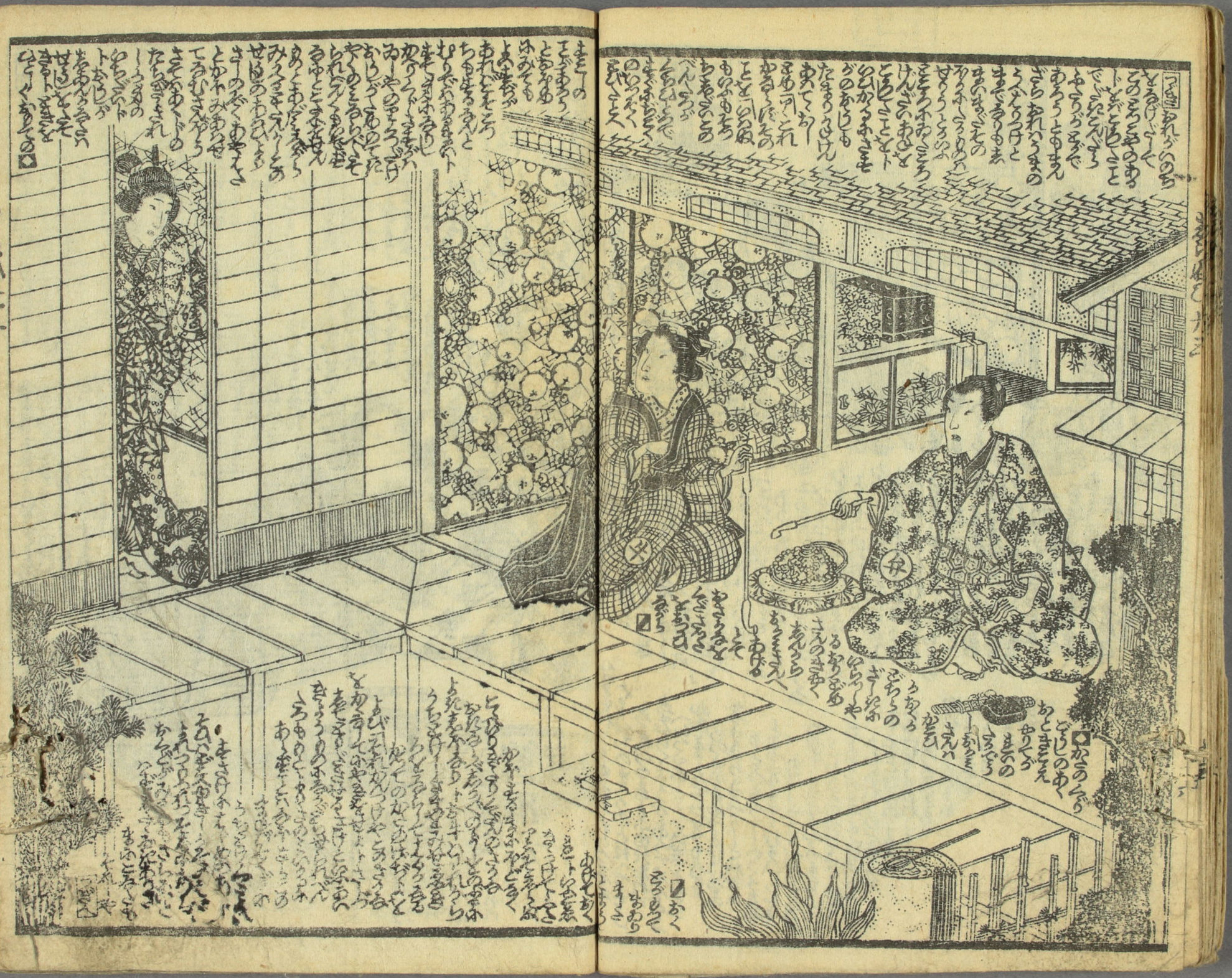
三笠山伊達五郎
東方
大蛇川鰐太夫
松の木時宇背九郎

虚
実
安政四年乙巳十一月
備書

朝
川田朝吉郎



虚
他
欲
寒
無



牛

白縫物語 第廿四篇
上集 種員作國貞画
柳下亭壽梓

白藤
廿四編上
譚
雅貨帋
國貞画
廿四編下
仮名文字

柳亭種員記

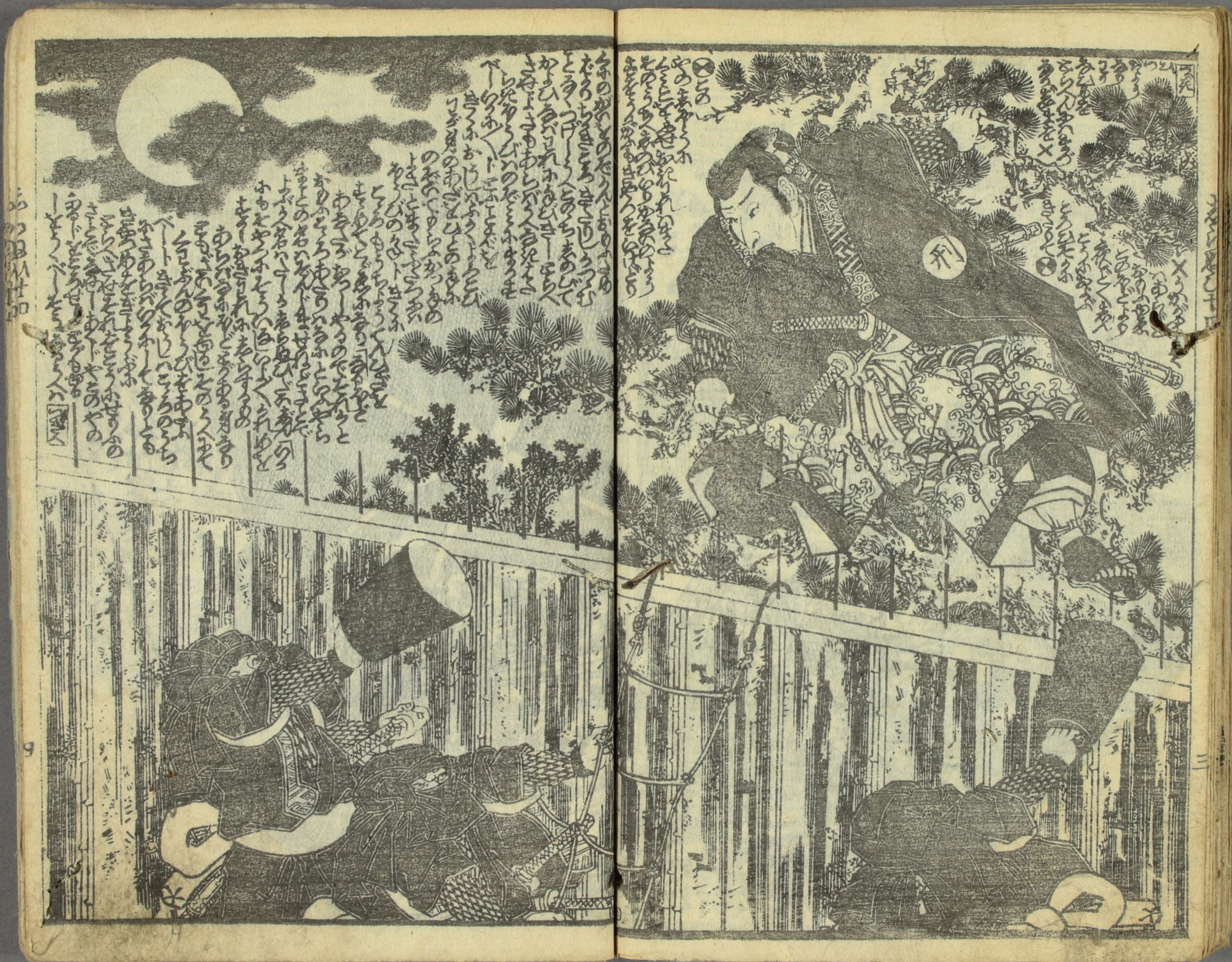
第廿四編

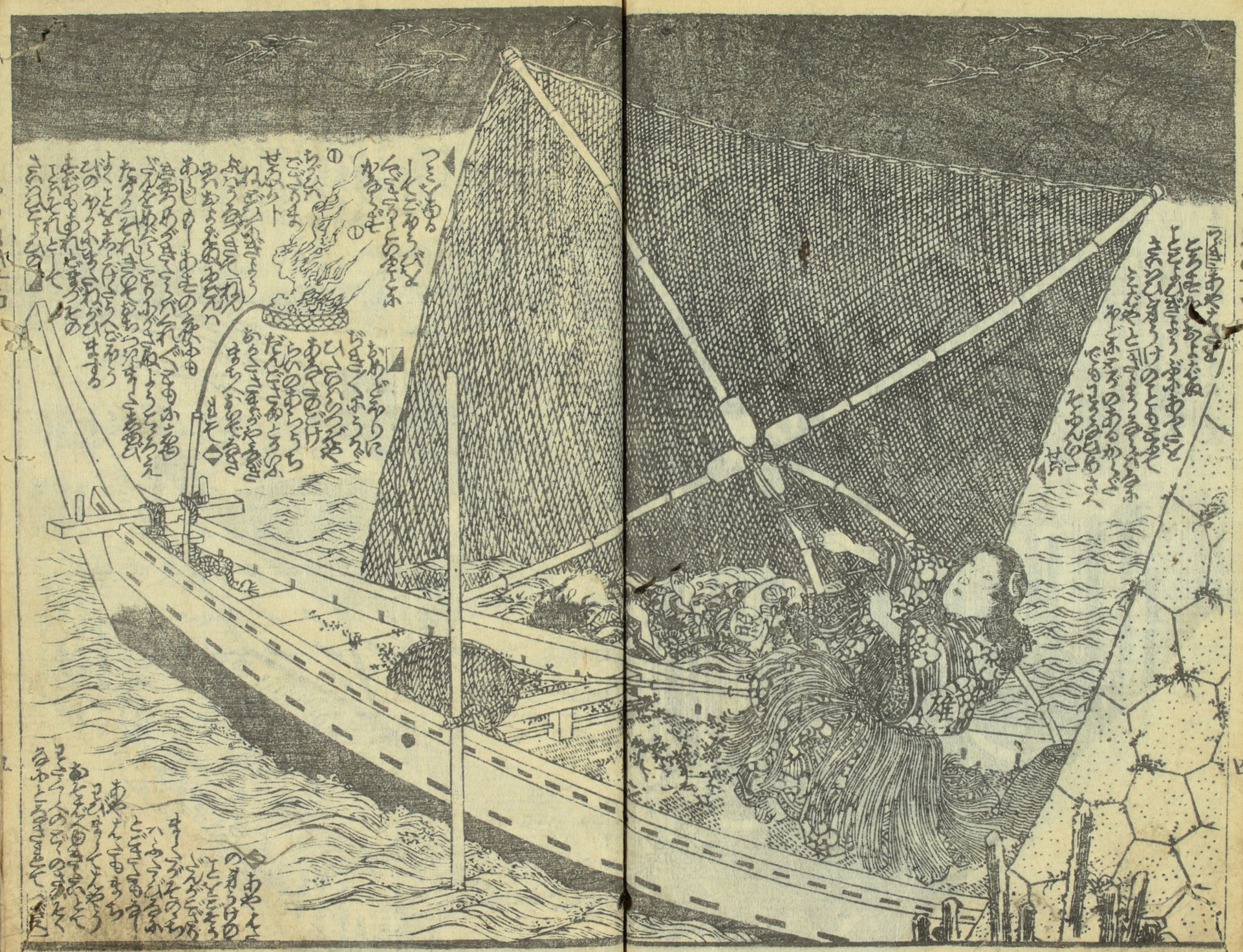
下冊

大吉

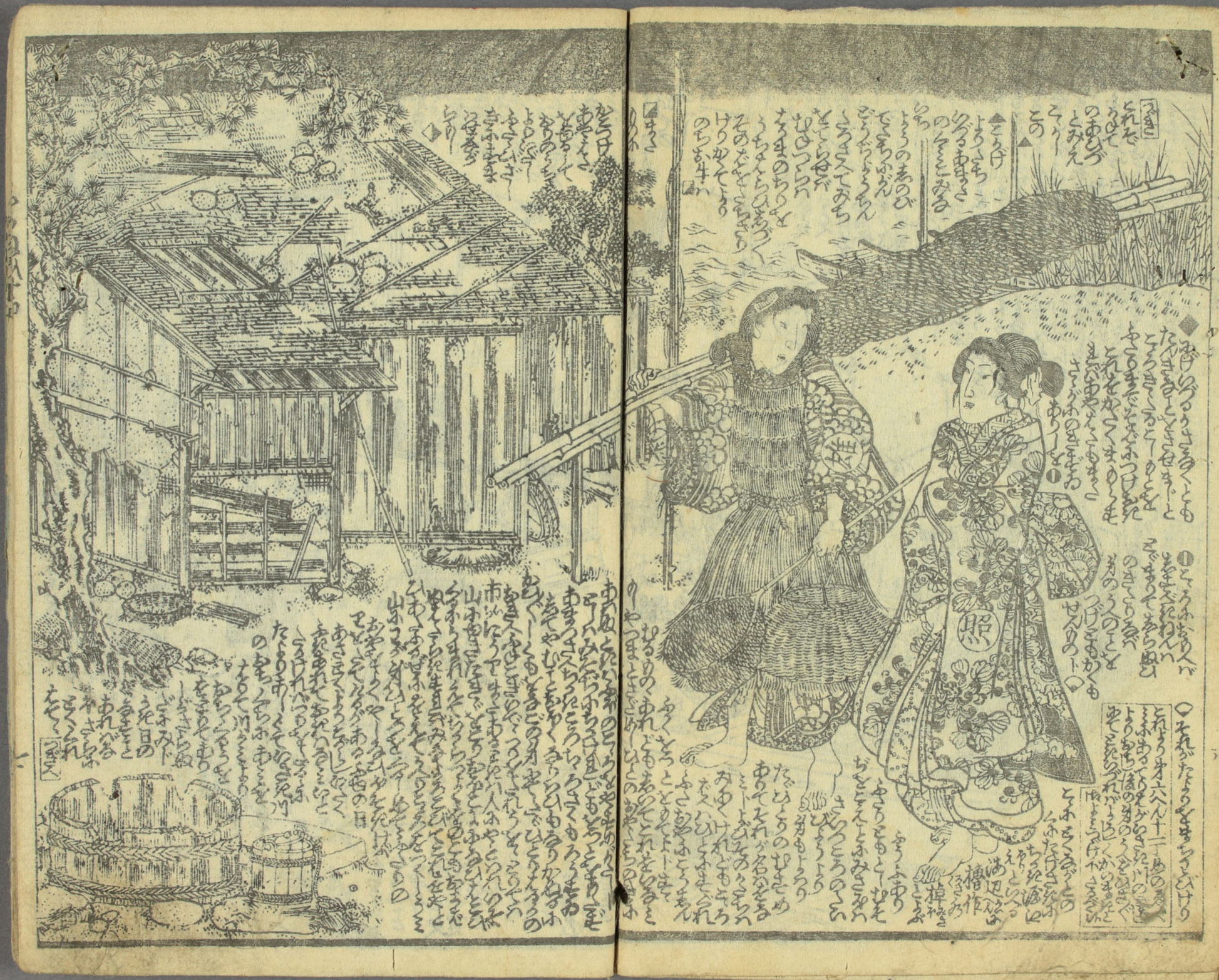
諸凡稗史ふ用る國い五畿内ぞ山城大和攝津ともて三ヶ國東海道ぞ伊勢國ふ遥隔て相模武藏東山道ぞ近江ぞろり山陽道い播磨ふかぞろり其他い假令あれどそ邂逅のことならん唐山のふ説も亦然ぬるふ思惟べ先哲も名の通ぬ國ふあり也吏い普通人の知國ふうとて作ーりの欤此不知火い野乘ふるりく法ろいぬ西海道の地名ぞ一向ふ多分まべいつそけとふ衆背ーどろけ山陰道へとれろら蹈込伯耆但馬出雲隱岐華ふ考て北陸道能登や若狹の方へも至らん先當卷いあり曳の山鳥の尾と詠ーるひーー人麿朝臣の旧蹟ぞろり岩見國高角の辺まぞ説ーりまりとなぞくーーかいつぐられば手習童達の手本ふ讀唱國尽ーといふものめべ清書どろで發凡草紙も一段見事の褒いあくて拙著貶不評のーーわりろぞ

安政元年改刻

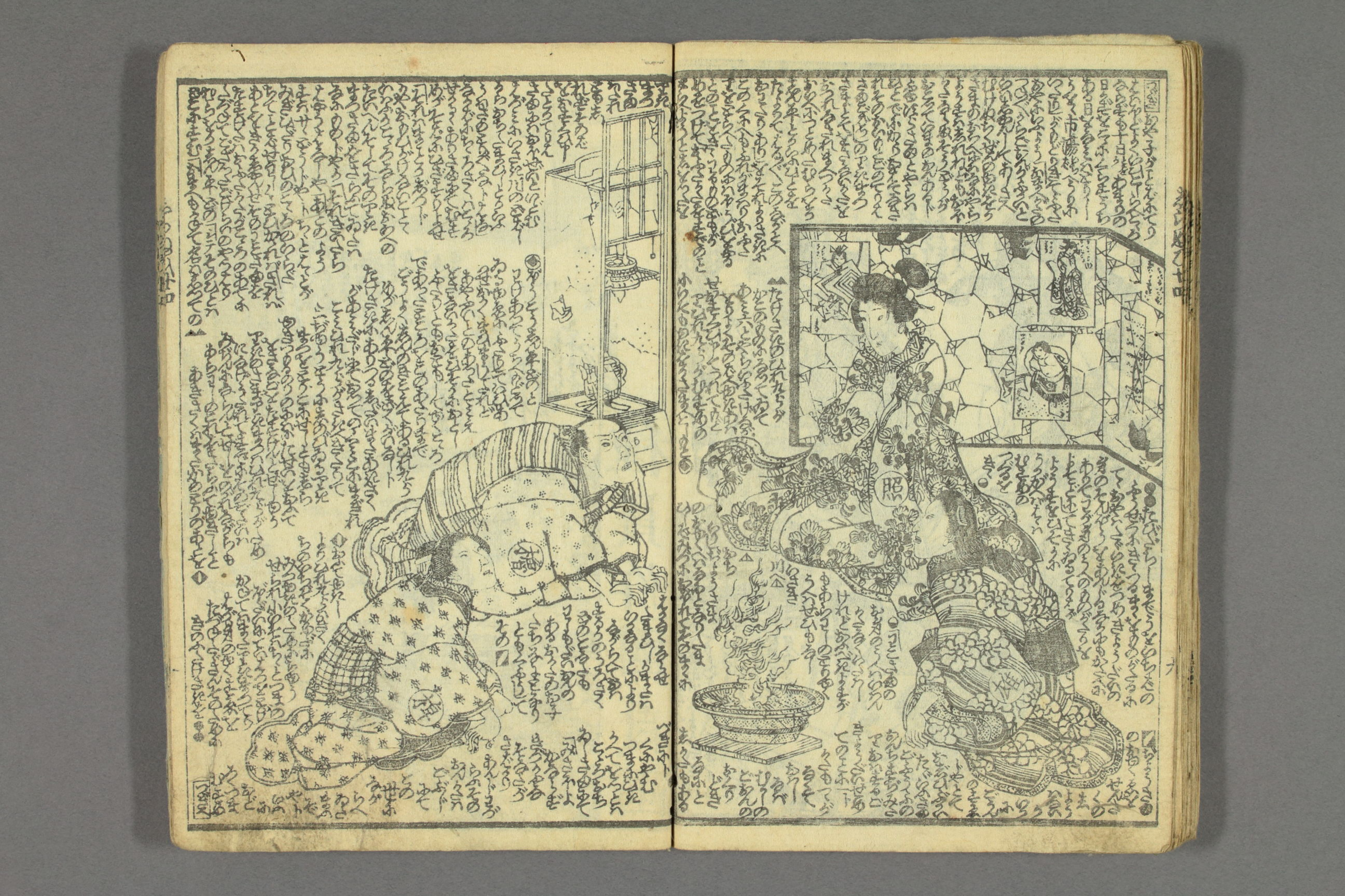




伊崎川浚場
定杭


照

雄浪奥市場の戦争
雪岡一家の凶変



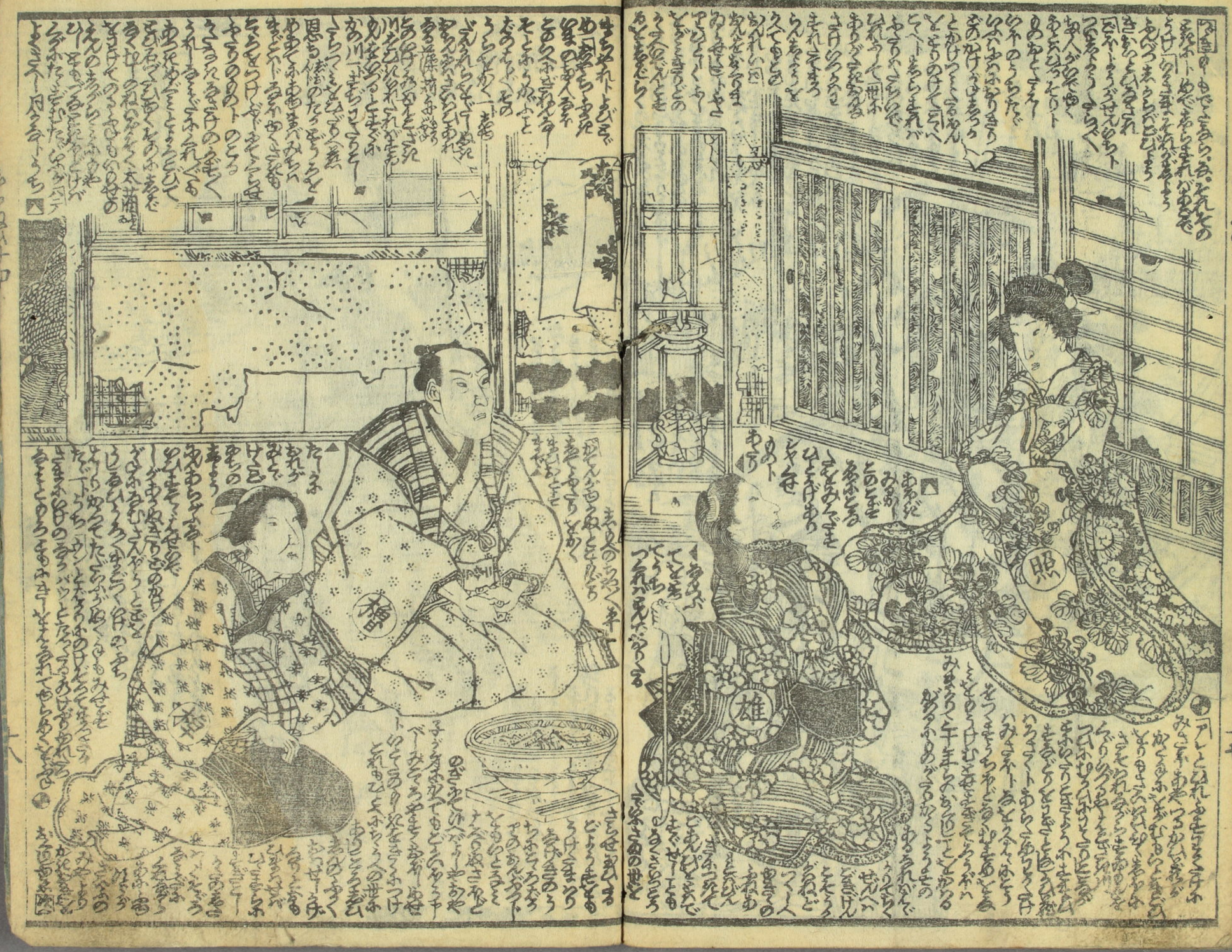
三の巻くらべ

種員作國貞画

竹
茶
鞭
弓
十町

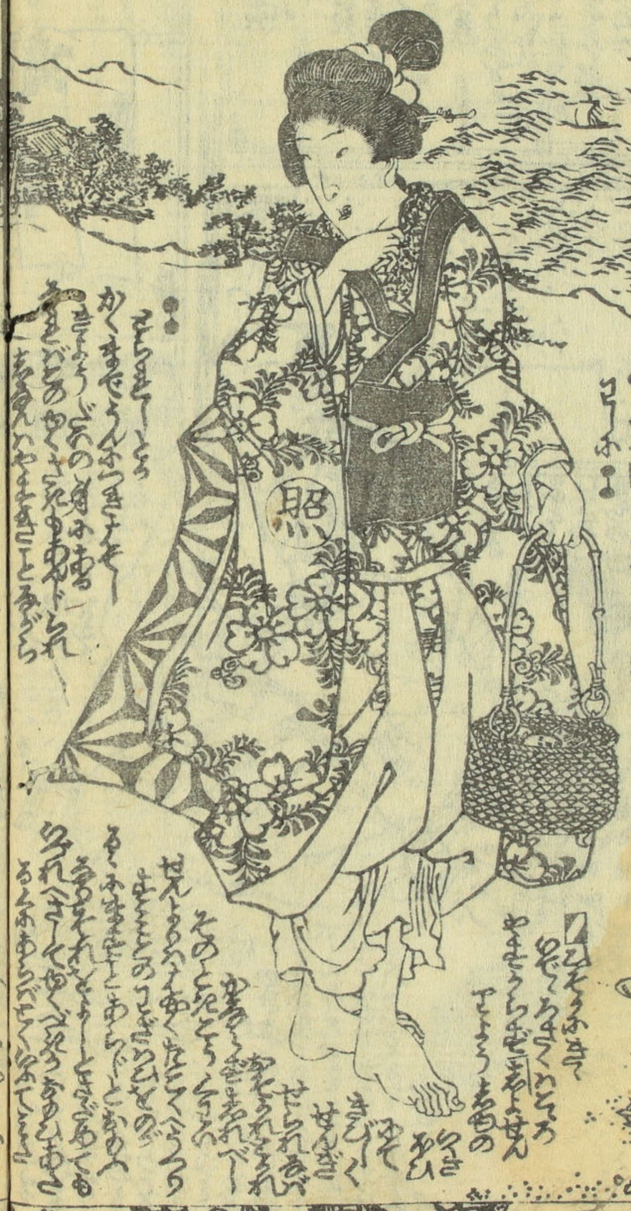
三の巻

竹
梅


照
雄
梅
松

鴨山の岩根しまける我をかも
知らにと妹が待ちつつあらん

岩見國美濃郡高角山鴨柿本社



風流十二ヶ月扇面
数種
其外扇
扇面品々
絵半切
封筒
沢山仕入
下料
上ハ
永安堂

七草四郎 若菜嬢子 不知火物語

作者 柳下亭種員

自廿二編至二十八編巳歳初春迄る出板仕候

附り

三笠山保達の郎が母と妹の仇討の八幡切を一場の趣向の山田順門が芭蕉の刀ひらり閃く電光い必死と生の松原の所々に落る雷鼓形

黒闇お牛が悪道が殺と帰るの恨の怨が報来て

武場の條々が花も物多の中物が三笠八幡宮の樹上へ

物の曲線る人道の利果別荘の庭中が面影の乞潜殺

曲工 森槃樓國貞

序

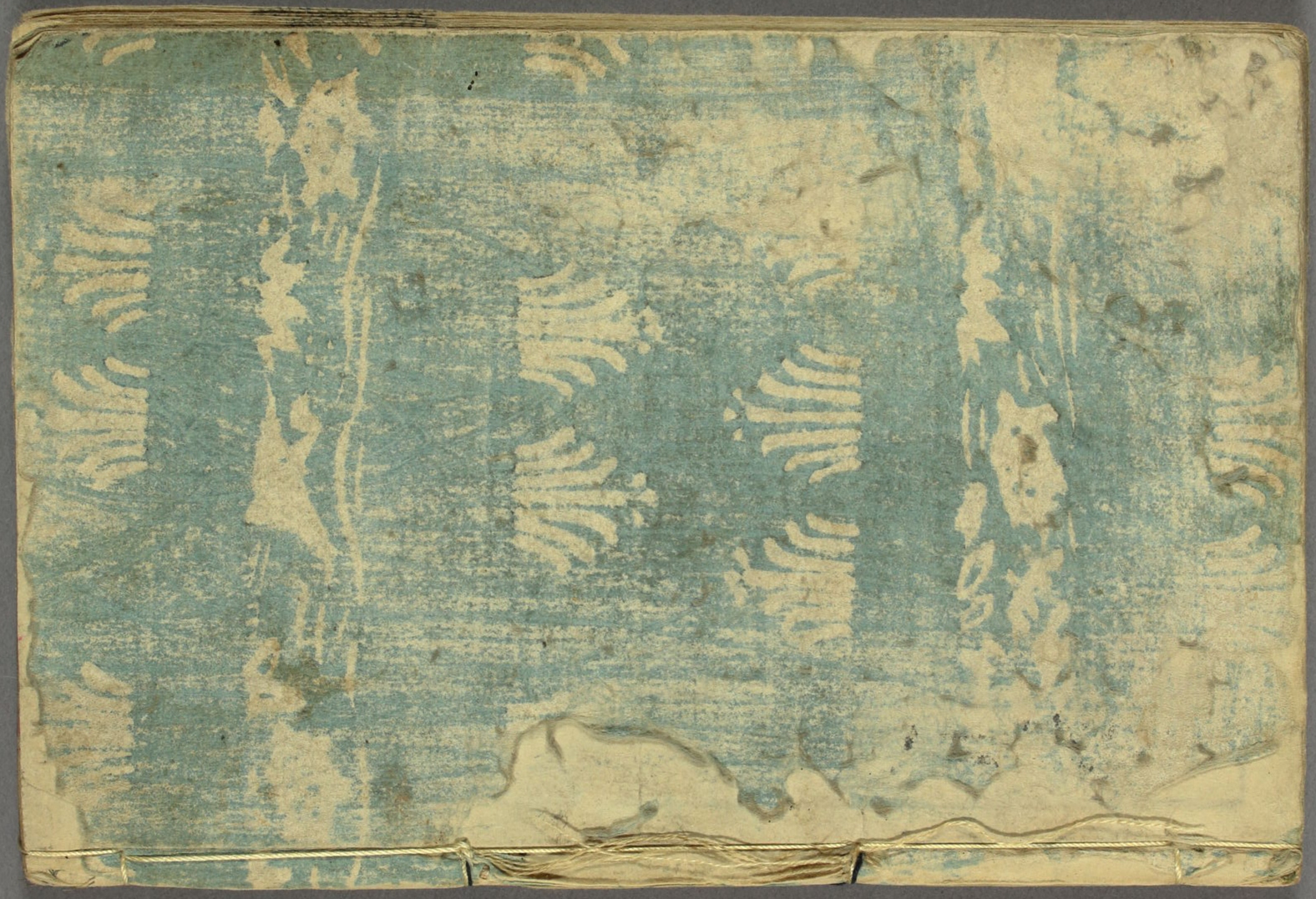
右之手紙口見物様方の所望に叶ひ声今稗成に之浮世草紙に仕合せ弥

出板致候に付て再板致新板に相成候廉新製本仕候共文政

対歳久に茶出板致打絞の為出廿三編廿四編廿五編廿六編廿

已来初春迄に出板致候に付ては一覧之程奉願上候

文政丙辰仲夏

序

板元 柳下亭